

## りっぱな裁判官(ドイツの昔話)

昔々、あるところに金持ちの男がいました。この男は出かけたときに5万円のお金を入れた財布を落としました。そこでこの金持ちの男は、立札を作り、「財布を拾って届けてくれた人には、1万円のお礼をします。」と書いて、町のあちこちに立てました。

それから間もなく、正直な男がこの金持ちの男の元へやってきました。正直者は、財布を金持ちの男に渡し、「道端で5万円のお金が入っている財布を拾いました。どうぞ受け取ってください。」と言いました。すると、金持ちの男は男の差し出した財布を受け取り、中に入っているお金を数えました。中には確かに5枚の1万円札が入っていました。

ところがその時、金持ちの男は、急にお礼をするのが惜しくなりました。立札に1万円のお礼をすると書いたのは金持ちの男自身でした。しかし、お金が惜しくなった男は急にこんなことを言い出しました。

「財布には6万円が入っていました。でも、今数えたところ中には5万円しか入っていませんでした。あなたはすでにこの財布からお礼を抜き取ったのですね。」

これを聞いた正直者の男はカンカンに怒りました。そして、正直者はこのケチな金持ちの男に、

「私が1万円をあらかじめ抜き取ったとは、とんでもない濡れ衣です。どちらの言葉が正しいか、裁判所に行き、裁判官に判断をしてもらいましょう。」

と言いました。

そこで二人は、裁判官のところに出向きました。まず、金持ちの男が自分の主張をしました。「私の財布には、確かに6万円が入っていました。しかし、この男から返された財布には5万円しか入っていませんでした。」

すると、財布を拾った正直者の男も言いました。

「私が拾った財布には、確かに5万円しか入っていませんでした。」

これを聞いた裁判官は、まず二人の男が嘘をついていないことを神様に誓わせました。それから厳かな声で、裁判官はこう言いました。

「二人の言い分を聞いて明らかなことは、正直者が拾った財布は、元々金持ち男のものではないということだ。従って、金持ち男は、6万円が入った財布を誰かが見つけてくれるまで気長に待っていなさい。そして、正直者は、いましばらくその財布を預かっていなさい。1年経っても誰も名乗り出なければ、その財布は、正直者、あなたのものになる。」

この裁判官の判断を聞き、金持ちの男は怒りで真っ赤になりました。しかし、後悔しても時すでに遅く、金持ち男は悔しさに涙を流しながら帰路につきました。

〈1009 字〉